

庭づくりを通して花のある豊かな暮らしを提案したい！

株式会社プランタス
月 江 成 人

庭づくりへのきっかけ

花卉研に所属した後も、今から思えば確固たる将来への展望もなく“ボーっと生きていた学生”時代でしたが、やはり転機は卒業後に海外に出て研修する機会を得られた時に訪れました。研究室在籍時には、故横井先生、安藤先生、上田先生にお世話になりました。横井先生からはしばしば英国の充実した園芸事情をお伺いし、また、「これからの時代は、パソコンができて、英語が喋れて、植物を知っていることが重要だね」と、よくおっしゃられていました。また、週に一度まるで高校時代の英単語の小テストのように学名のテストがあって、せっせとまだ見ぬ植物（当時は当然まだインターネットもなく、画像検索などもない時代）の学名を体で覚えていたりしていました。安藤先生がかつておっしゃれていた通り、“まだ頭の中が空っぽ状態の学生”時代に詰め込んだ学名は今でも頭の片隅に残り、すぐに口に出せる状態です。一つ想定外だったのは、植物分類がAGPに代わって科が目まぐるしく変更されてしまったこと。年を取ってしまった今となってはなかなか新たに覚え直そうという気力が湧いてこないというのが実情でしょうか！

そんな諸先生方の後押しによって、卒業後英国のウイズリーガーデンで研修する機会を得ることができました。初めての渡航。生活／文化が違うのは当たり前と思っていたので、実際の生活に関してはそんなに驚きはありませんでしたが、初めて庭園を見たときの鮮烈な印象は今でもよく覚えています。まるでカーペットのように美しく整備されているふわふわの芝生。世界中から集められた見たこともない珍しい植物たち。1000属検定で覚えたのがこの植物かと、覚える順序が違うこともそっちのけで、写真を撮りまくりました。そしてそれらの植物をうまく組み合わせて見事にデザインされた庭園の数々。それは、本当にカルチャー・ショックならず大きな“ホルティカルチャー・ショック”でした。こんな場所なら、それほど植物に興味がない人でも楽しめ、季節を変えてまた来たくところだと思ったものです。その後米国のロン

グウッドガーデンでも研修する機会があり、英国とは違ったアメリカならではの植物を使ったエンターテイメント的なディスプレイ手法について学ぶことができたのも幸運だったと思います。

帰国後はしばらく国内の植物公園の企画運営管理に携わり、来園者に「きれいですね」と喜んでもらえることを励みにしていましたが、もっと個人レベルでの庭園づくりにも携わりたいという思いが募り、2007年に、かねてから温めていた古民家での田舎暮らしをスタートさせると同時に業務形態を大きく変え、個人庭園のデザイン・施工のビジネスを始めることにしました。

庭づくりの現状

最近の庭づくりというと、家のデザイン自体が“洋風”のものが増え、門構えも外構工事によるものをよく目にするようになってきました。10年後には陳腐化して格好悪くなっているのではないかと余計な心配をさせられるような奇抜なデザインのものがあったり、植物などは、これからどう育っていくかなどは全く無視したような植栽が行われているのを目にすることもあります（これを庭と呼んでいいのかどうか疑問なところもありますが）。また、植物が1つでも植えられているのはまだましで、中には雑草管理を少しでも減らしたいと、防草シートを敷いて砂利を乗せるだけの庭もあったりします。私には、生き物の気配が無い、なんとも不気味な場所のように映るのですが…。共働き世代が増えて緑を管理する時間が減ってしまったのと共に、若い世代を中心に緑への興味が薄らいできていることが大きな原因なのかもしれません。

そんな世の流れに逆らうかのように、これでも花卉研の卒業生の一人とプライドをもって、あえて“地域の景観と調和した植物が主役の庭づくり”をコンセプトに立てて庭づくり仕事を始めました。“洋風”の庭ですが、実際に欧米の個人邸を見ますと、ハードな部分ではできるだけ緑で覆い隠すようにしていて、生垣やつる植物をうまく使って緑が映える庭づくりが行われています。どこで

どう解釈されてこのような庭づくりが主流になってしまったのかわかりませんが、可能な限りせつかく咲いた花が美しく見えるように、生け垣などで背景に緑を整備して季節ごとに楽しめる庭づくりを目指しています。かつては、日本も生垣を備えた庭は普通にあり、町の景観に潤いがもたらされていましたが、時代の移り変わり、都市化と共に徐々にそのような庭が減ってきてしまいました。また、古くより閑静な住宅街と知られ、広い敷地に緑豊かな植物が管理され地域の景観づくりに大きく寄与していた家々が、近年相続の事情などにより売りに出され、その結果、小さな区画になって分譲され、わずかな植栽スペースに車一台の駐車場を確保するのが精いっぱいの家が増えたことから、どこにでも見られるような普通の住宅地の景観に一変してしまったという例もあります。欧米に旅行すると美しい街並みに感動することがありますが、それは統一感のある建造物、豊富な緑がつくりだしている景観でもあります。残念ながら日本家屋が廃れ、小さな区画にさまざまな色、形の家が立ち並ぶようになってしまった日本の都市部で、景観を整える最後の手段は、生垣などで作り出す緑しかない、無謀と思われる野望に燃えています。



緑の生垣はどんな建築物にも合い、景観に潤いをもたらす、そしてその前に咲く花々を引き立ててくれる

もちろん、植物を植えるからには管理の手間が発生します。温暖化で夏の暑さもより厳しくなって、管理作業も徐々にたいへんになってきています。耐暑性があり、気候にあった植物を組み合わせ、植物の生育特性を知り、土壌改良、マルチング、効率的な灌水方法などを施すことで、植物は放っておいてもよく育つようになります。植物がよく育ち大きく地面を覆ってくれば雑草の発生する割合も少なくなります。傍目にはたいへんと思

われる管理も実はそれほどたいへんではなかったりします。近年、オープンガーデンが各地で開催されて賑わいを見せていますが、そのほとんどは春に行われています。夏は植物が傷んでオープンガーデンなんて無理というのが理由の一つとして聞くのですが、ご存知の通り日本は世界に名だたる園芸植物の宝庫であり、温帯の中の温暖湿潤気候に属し初夏から夏にかけて元気よく育ち花を咲かせてくれる植物が数多く自生しており、そんな植物を使えば欧米に負けない美しい庭づくりも不可能ではないと思っています。



日陰を生かした庭 ギボウシ、ウラボグサは、日陰の庭には欠かせない重要な日本原産の植物



蒸し暑い関西でも、気候に合った丈夫な植物を組み合わせれば、欧米にも負けない花壇をつくることは可能

白花のヘメロカリスが無い

最近は庭づくりについての講義も頼まれることが多くなり、そこで庭づくりに興味を持っておられる方々と話をする機会がよくあるのですが、庭づくりの際にいざどのような植物を植えてどのようにデザインしていったらよい

のかわからず、手探りで試行錯誤を繰り返されている方が多いように思います。もちろん、さまざまな園芸書も書店で入手はできますが、ある一辺だけの写真をみただけでは馴染みの少ない植物を使いこなすのは一般の方には難しいと思います。園芸店やホームセンターで聞いても、いかんせん苗の状態なので、実際に地に下したら、どれくらいの時間で、どのような大きさ、形になるかなどの情報は、よほどの知識をもつスタッフでないと得づらいというのが実情でしょう。

欧米の植物公園には、しばしばアイデアガーデンと称するセクションがあって、一般家庭での庭づくりに役立つテーマで植栽展示を行っているところがあります。例えば、生垣やつる植物の見本園、観賞を兼ねたキッチンガーデン、コンテナガーデン、暑さや乾燥に強い植物を組み合わせた庭など、テーマごとに見本園が整備されおり、実際に大きく育った姿を見ながら、個々の植物の性質を学ぶことができます。これから庭をつくろうとする人はわざわざそこへ出かけ、熱心にメモを取ってさまざまな情報を得ようとしています。

しばしば、きれいに整備された庭園がある地域は、個人庭もレベルが高かったりしますが、やはりそれはよい見本が近くにあることが大きく寄与しているからだと思います。

ある植栽工事で白花のヘメロカリスをデザインに入れ

たので、苗が入手できるかあちらこちらに聞いて回りましたが、なかなか見つからないことがありました。問い合わせをする中で聞こえてきたのが、昔はいろいろな色を作っていたけど売れないから作るのを止めたという話です。アメリカなどではとても人気が高いですし、東アジア原産の植物ですから気候にもあってよく育つはずなのに、なぜ日本では人気がないのか。日本国内には白花のヘメロカリスが存在しないのかと、情けなく感じたことがありました。最終的にはようやく苗を確保することができましたが、当たり前と思われる植物でさえ、一般には知名度が上がらず、結果、流通がなくなり、庭づくりにおいても植物のバリエーションが広がらずに面白くない庭ができあがってしまうという悪循環に陥ります。このままでは園芸業界は衰退してしまうのではないかと庭づくりの観点から思ったりしました。庭植えて立派な株になっていくつもの花を咲かせているヘメロカリスは、すぐに人の目を引き、どこで入手できるのかよく聞かれるということからも、園芸植物の普及にまだまだ努力と改善の余地があるような気がします。

日本国内に実際の庭づくりに役立つ情報が得られる施設がないかという点、実は都市緑化植物園という施設が各地に整備されていて、海外同様に見本園があったり、緑の相談所も併設されていたりして、園芸に関する疑問が解決できるようになっています。ところが、何か



花壇で存在感たっぷりのヘメロカリス 庭であまり利用されないのは本当にもったいない

敷居が高く感じられるのか、花のシーズンになっても意外と静かな雰囲気です。また中にはなかなか管理費もつかなくて維持管理に苦労しているなあという印象の施設があったり、間に合わせの植栽で済ましてしまい、レベルがお世辞にも高いといえないところも散見したりします。これでは、なかなかリピーターを呼ぶことは無理だし、ましてや園芸人口の底上げにもつながらないような気がします。最近では、一般の方々もさまざまなところから情報を得たりしてかなりレベルが高くなっており、そのような関係機関に所属されるスタッフのレベルアップ、そして運営予算の確保も重要なことと考えます。

実際の庭づくりを通して

ある少し高級な佇まいの家が立ち並ぶ一軒のお庭を整備したときに、道を歩いている方々にも花を楽しんでもらいたいという施主さんのご意向で、個人の敷地ながら通りからも楽しめるオープンになった花壇をつくりました。そうすると、散歩で前を通る人が徐々に増え、また、今まで花を植えていなかったご近所さんも少しずつ見様見真似で花を植えたりするところが出てきました。おかげで、この町内会全体の景観並びに雰囲気がさらによくなってきたように思います。誰もがきれいなところに住みたいと思っているはずで、どこかきっかけとなるような良い見本ができれば、そこから派生して点が線となり、最終的にはその地域全体が園芸、庭づくりを通して美しい景観形成につながっていくのではないかと思います。

コロナ禍ではありますが、ありがたいことにまだ私の住む地域ではそれほど庭づくりの仕事に関しては影響を受けているような印象はありません。逆に外出を制限されたことで自宅で過ごす時間が増え、庭があったお陰でこの暗いニュースの中でも気を紛らわせることができたとおっしゃる方も何人かおられました。とはいえ庭を整備するというのは、家を建てた後、経済的、精神的余裕があってこ

そできると考えられる方が主流です。今回のパンデミックで、日本のみならず世界全体がかなりの経済的な損失を出しているはずで、今後様々な形でその影響が出てくることも考えられます。なんとかこのコロナ騒動が一日も早く収まり、平穏な世に戻ることを願うばかりです。

庭づくりを通じて知り合った方で、家庭内で相次いで不幸を経験された女性の一言がとても心に残っています。「ほんとうにつらいことが続いたけれども、庭づくり、花づくりに巡り合えたからこそ、乗り越えて今まで生きてこられた」と、オープンガーデンの際に伺いました。園芸は、人を癒すという効用を持っています。こんな災難の時だからこそ、園芸の重要性が再認識されることと思います。これからも心の庭を耕すような園芸文化の普及に寄与できれば願っています。



通りに面した一年草花壇 散歩している人々の目を和ませる



つい先日竣工した県立農業大学校創立 100 周年を記念した校舎前広場の庭
自然石で作ったサークル型のベンチが学生たちの語らいの場所を提供する